

## 文に於ける呼格と述格

石 神 照 雄

- 一 はじめに
- 二 文の内容
- 三 文の形式
- 四 述格と陳述
- 五 呼格と指示
- 六 おわりに

### 一 はじめに

文法研究の中心課題となるものは文とは何かである。この問い掛けに対し、山田文法は、日本語の文には根本的に差別のある二種類の発表形式があるとし、これを「述体」「喚体」とする。文の研究として今日この類別の論理をどのように捉えるかは、山田文法それ自体の研究成果の把握と吟味というだけではなく、日本語の文法研究の射程を今後どのように見極めて行くかという点からも重要である。

これまで筆者は「喚体」に関するいくつかの検討を行って来た。それは以下に述べるような判断と意図による。今日に至るまでの文法研究の歴史を振り返るとき、山田文法が提唱した「喚体」に対する追究は、質量共に乏しく「述体」に関するものに比して甚だ不均衡な様相を呈しているの思いに至る。

我々が文を研究の対象とする場合、その文とは日本語の現実の姿を限なく映し、同時に我々が有する文の意識を満足させることが出来るものとしてあるべきである、との思いがある。しかしながらもう一方では、文の意味、殊に判断に関わる意味は文末部分で確定すること―所謂文末決定性―を理由に、日本語に於いては文末に位置する述語を以て文は文として取り上げることが出来る、という意識もある。これはまた、述語に先行する種々の要素と述語との構成を論ずることを以て日本語の文の仕組みは捉えられると見なすこととなり、ここに述語を持つ文が日本語の代表であるとの文研究の枠組み意識が確保されることになる。

しかしながら、述語を有する文は、我々の文意識の多くの部分を占めるものとは言え、我々が意識する文の全体的なものには及ばない。「喚体」として山田文法が取り上げる文は、所謂主語―述語の関係把握できるものではないにも係わらず、我々の自然な日本語意識では紛う方なき文として在る。そのことは日本語の具体的な表現に於いて見出すことが出来る。我々は、

道のべのむくげは馬に食はれけり

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

という芭蕉の俳句に接するとき、前者は「食はれけり」という述語を持つ「述体」の文一つから成る言語表現とし、後者は「閑かさや」「岩にしみ入る蟬の声」という二つの「喚体」の文による言語

表現として把握する。この時、後者の各々の「喚体」は、文として在ること、前者の「述体」と何等異なるところはない。何れの「喚体」の文も、その素になる「述体」の文というものが前提され、次いで省略等の加工修正が施されることで結果として「喚体」という特殊な地位に立つに至ったというものではない。「喚体」の文はそれ自体が独自に十全な文として在るものである。我々は右の如く文を把握することが出来るのであり、そうであるならば、日本語の研究の対象は、「述体」の、所謂述語を有する文に留まることなく、更に「喚体」及びその周辺のものへと対象を広げるべきである。また、そのことは文法論の世界に新たな展開を引き起こすことを予想させるのである。

本稿は、右のような想を以て筆者の今日までの研究に連なるものとして、山田文法の「喚体」の内部構造の具体的な分析への橋渡しを意図し、ここでは山田文法に於ける文研究がどのようにして二種類の文を抽出することへと至ったか、更に「述体」「喚体」の中核である「述格」と「呼格」の概念について再検討を行う。

## 二 文の内容

さて、山田文法が「述体」「喚体」を説くところは、

\*\*\*その命題の形をとれる句は二元性を有するものにして理性的の発表形式にして、主格と賓格との相対立するありて、述格がこれを統一する性質のものにして、その意識の統一は述格に寓せられてあるものなり。この故に今之を述体の句と名づく。次にその主格述格の差別の立てられぬものは直感的の発表形式にして一元性のものにして、呼格の語を中心とするものにして、

その意識の統一はその呼格に寓せられてあるものにしてその形式は対象を喚びかくるさまなるによりてこれを喚体の句と名づく。(山田一九三六、九三五〜九三六頁。引用はじめの\*\*\*は以下含め識別のため私による。)

というものである。ここにいう「理性的の発表形式」の述体の句とは、前節で例とした述語を持つ文を含むものであり、代表的には、花咲く。

夕焼けは赤い。

という主語―述語関係の文を指す。これは肯定断言の判断の表現である。また「直感的の発表形式」の喚体の句とは、先の俳句でのものや、

妙なる笛の音よ。

三笠の山に出でし月かも。

というようなものである。これらには主語―述語の関係を捉えることは出来ない。しかしながら、理性の発表形式である述体とは領域を異にしてはいるが、体言を表現の中核とすることで日本語の文として在るものである。尚、ここに山田が「句」と称するものは山田文法独特の概念規定であり、我々が通常一つの文として意識する所謂単文に相当する(注1)。また、ここでの「意識の統一」とは、以下に見るように思想の組立に於ける「統覚作用」の概念に相当する。

ところで、文の類別に先行して、山田文法に於て文を捉える基になる考え方は、

\*\*\*吾人は一の語にてもある思想をあらはしうべくして、それらの語は語として考ふれば一語たるに相違なく、文として考ふれば一の思想をあらはしたるに相違なければなり。かく一の語にし

と同時に一の文たりうることありとせば、その語と文との区別はたゞ外貌上の説明にては判明しうべきにあらざるは明かなりとす。こゝに於いて我等はその区別の主眼点はこれら外貌上の如何に存するにあらずして、そが深く思想の内面に根柢を有するものなるべきを見るなり。(同、九〇一頁)

という記述に見る如く、思想である。これは、右の引用に先立っての、

\* \* 文と語と区別は語の数などいふ外面上の区別によりて認むるを得ざるものなるを知るべし。(同、八九九頁)

との記述にも明かなように、文を外面ではなく内容面を優先して追究することに拠るものである。その内容に関しては、

\* \* 即ち考ふるに、一の語又は語の数の集合体が、文とするを得る所以のものはその内面に存する思想の力たるなり。惟ふに思想とは人の意識の活動にして種々の觀念が、ある一点に於いて關係を有し、その点に於いて結合せられたるものならざるべからず。而してこの統一点は唯一なるべし。意識の主点は一なればなり。この故に一の思想には必ず一の統合作用存すべきなり。今これを名づけて統覚作用といふ。この統覚作用これ実に思想の生命なり。この統覚作用によりて統合せられたる思想の言語といふ形にてあらはされたるもの即ち文なりとす。この故に一の語にせよ、数多の語よりなるにせよ、ある統覚作用によりて統合せられたる思想の発表なる場合には文と認むべきものとす。(同、九〇一〜二頁)

というように、思想を取り上げ、そこに於ける「統覚作用」を以て文の把握へと至る。また、この文の内容を成す思想に関しては、

\* \* 抑も文は思想を完全にあらはしたるものなりといふことは何

人も認むる所なり。而して単文は単一なる思想をあらはしたるものなりといへり。然らばその単一なる思想とは何ぞや。惟ふにその思想とは人間の意識の活動せる状態にして各種の觀念が或る一点に於いて關係を有し、その一点に於いて統合せられたるものならざるべからず。この統合点は唯一なるべし。意識の主点は一なればなり。この故に一の思想には一の統合作用存する筈なり。今之を仮に統覚作用と名づく。この統覚作用これ実に思想の生命なり。雑多の觀念累々として堆積すとも之に對して統覚作用の活動することなくば終に思想たること能はざるなり。ここに於いて単一なる思想とは何ぞやといふことに答ふるを得べし。曰はく、単一なる思想とは一の統覚作用によりて統合せられたるもの、換言すれば、統覚作用の唯一回の活動せるものをさすなりといふを得べし。(同、九一六頁)。

というように、「統覚作用」の活動による組立であることを重ねて強調する。以上のことを踏まえて提示されたものが、

\* \* 一の句とは統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表をいふ。(同、九一七頁)

という句即ち単文の定義である。

これまで検討したことよりすれば、山田文法とは、文とは何かの問い掛けに対し次のように応答しようとしたものであると言えよう。即ち、文研究の方途として、表現としての文の内容の側から分析すること重視し、内容である思想を取り上げること答えを導こうとした。直接的には思想をその中核である「統覚作用」を以て眼目とした分析である。ここから導かれる文研究とは、「統覚作用」が言語上にどのように実現するのかを解くことである。

### 三 文の形式

さて、前節で山田文法が示した文の定義に至る分析を『日本文法学概論』上に辿るならば、

- ・形式に対して内容を優先する。
  - ・文の内容は思想である。
  - ・思想は統覚作用の活動による組立である。
  - ・文とは内容を持った言語の独自の形式である。
- として要約することが出来よう（第四十三章 句、九〇七頁以下）。尚、同様の論理展開はこれより早く『日本文法論』にも見ることが出来る（第二部 句論、第一章 句論の概説、四 句とは何ぞ、一一七四頁以下）。

ところで、先の定義に続けて山田は、

＊＊なほこゝに注意しておくべきは、吾人がこゝにいふ統覚作用とは、意識の統合作用を汎くさせるものなれば、説明、想像、疑問、命令、禁制、欲求、感動等一切の思想を網羅するものなり。さる意の思想の活動の一回行はれたるものが、言語によりて発表せられたるものを一の句とはいふなり。（同、九一七～八頁）

と述べる。これに則れば、説明とか感動といった統覚作用の具体的な姿の違いが、句即ち文としての発表形式の異なりを生み出すとの予想を抱かせる。確かに「文とは何か」の追究が内容の面からのみということであれば、思想の種類に応じて文のモデルの種々を設定するということも考えられよう。また、思想の分解と文の形式の分解とを相互に関連させ、意味の要素に文の部分が対応した単位を設定し、これを以て文の構成を論ずるということも考えられよう。何

れにしてもこれらは、文を研究することは思想を分析することを以て実現可能と見なすものである。

しかしながら、山田文法では右に述べたようなことは行われない。文の追究に山田が持ち込むものは、

・文に於ける形式の完備とは何か。

という観点である。これは、先に示した分析と合わせて考えるならば、山田文法に於ける文研究とは、内容と形式との統一として、日本語が有する根源的な姿を追い求めたものと言えよう。文を規定しようとすることに於ては、言うまでもなく形式という面の取り上げを拒否することは出来ない。何故ならば、言語は個人の主観に依存するものではなく、社会的存在として論理を有して在るものである。山田はこれを、

＊＊それ言語の所依たるや一個人の主観にあらずして社会の集合意識なり。個人が如何に之を主張すとも之をきく人にして得せずんば、到底其の効を奏せざること明かなり。この故に文の制限はこゝに存す。発表せる人自身の思想と同様なる（たとひ全然同一ならずとも、少くも基礎に於いて共通する同傾向の）思想を他人の意識内に喚起せしむることの必然なるか否かといふ点これなり。（同、九二二頁）

と述べ、また、

＊＊句の完備不完備を鑑別すべき要件は一の思想をその言語に寓して同じ社会の人がこれに対して一定の思想を必然的に喚起しうるか否かといふ一点に帰すべきものなり。即ち、完備せる句と不完備なる句との区別はそれによりて聴者に説者の発表したると同様なる一定の思想を喚起しうる条件を備へたりや否や、若しくは説者自身の思想の発表たるに止まり、聴者がこれにより

て、必ずしも説者の発表したると同様な思想を喚起しうべきものと限られざる場合との区別を以てこれが、形式の完備不備の分かるゝ所とす。(同、九三三頁)と述べる。

ここに見るように、山田文法では、文とは何かの問い掛けを言語の社会性という観点を導入し、思想を発表する形式として文はどのようなに在るかに向かうのである。即ち、文として完備するものか、或いは不完備なものかの分岐点を、当該言語の社会に於いて形式が社会的に承認されるか否かにある、と主張するのである。つまり、社会性を以て文の形式に根拠を与えるということである。従って、完備した文として文が在るということは、或語序に於いて或思想の発表を行うことである。これが完備した文としての姿である。文は思想の発表として語序を執るのである。この語序を執ることが即ち文の形式である。文にとっては、語序という形式を以て、内容である思想がそこにように在るということである。そして、このことを文が自らの性質として有するのである。ここに述べて来たことを要約すれば、文の性質とは内容と形式の関係ということである。

山田文法は、右のことを踏まえ文の性質の一般的な在り方がどのようなものであるかを追究し、その結果として日本語の文に於いては文の性質を二種類として抽象できるという議論を展開したのである。これが本節の冒頭に掲げた文分類の説明、即ち「述体」「喚体」である。文の性質である形式と内容との関係を根拠として、文は日本語では「述体」「喚体」という二種類である、と山田文法は規定したのである。

以上述べたところが、山田文法が日本文法学上に価値を持つと広く承認される所以である。殊に、言語の社会性の視点から文に形式

としての完備という在り方を導入したことは重要である。これにより、文研究とは単に思想に依じて文の姿の異なりを論うというような次元のものではないことになった。「述体」「喚体」の類別とは、日本語に於ける思想発表の様式を追究した原理である。言うならば「述体」「喚体」とは、山田文法という文法理論がその成果として宣言した文の定理である。それは、内容と形式との統一を日本語の文法論上の文に抽象することを目指した研究として、未だこれを超えるものが提示されていない水準に於いて在るものである。

#### 四 述格と陳述

さて、前節のはじめに引用した山田文法の規定に従うならば、「述体」「喚体」の異なりとは、意識の統一、即ち思想の中核である統覚作用が言語形式としてどのように抽出されるか、という問題に収斂する。文の類別とは、文が表現されるとき文の内部構造に於いて何がどのように統覚作用を担うのか、という課題に対する分析結果である。この問い掛けに対し、山田文法は次の分析をその回答としたのである。即ち、統覚作用を、述体の文では「述格」が担い、喚体の文では「呼格」が担う。

しかしながら、右の分析を、統覚作用が構文形式に転写されるという関係に於いて眺めるならば、山田文法の論理は、述体の文と喚体の文との間で厳密な平行的展開を現すものとはなっていない。つまり、述体文を導くために抽出される概念が、喚体文に於ても同値的に抽出されるという関係にはないのである。確かに、述体では「その意識の統一」は述格に寓せられてある、喚体では「その意識の統一」は呼格に寓せられてある」として、両者とも統覚作用が

構文上に実現する姿が「格」として取り上げられている。この点では両者は平行的である。だが各々の「格」の内部関係の組み立てに関して、語が構文上で果たす役割の分析には大きな違いがある。先ずは述体の述格について検討する。

山田文法では、述格とは用言が「陳述」をなすに用いられる位格であり、

\* 陳述をなすといふことはこれを思想の方面よりいへば主位の觀念と賓位の觀念との二者の關係を明かにすることにして、その主賓の二者が合一すべき關係にあるか、合一すべからぬ關係にあるかを決定する思想の作用を以て内面の要素として、それを言語上に發表したるに外ならず。而してこの陳述の能力のみの言語としてあらはさるゝものを論理学にては *copula* といへり。

(同、六七七頁)

というように、判断の内部構造から「陳述」を説く。これは、述体文の思想の中核である統覚作用が判断の内部構造に対応して構文上の述格へと転写されるに際して、「陳述」という構文機能として抽出されたことを述べたものである。そして、

\* 用言とは陳述の力の寓せられてある語にして多くの場合に事物の属性を同時にあらはせり。(同、一四三頁)

\* 用言の用言たる特徴は実にその陳述の作用をあらはす点にあり。この作用は人間の思想の統一作用にして、論理学の語をかりていへば主位に立つ概念と賓位に立つ概念との異同を明かにしてこれを適当に結合する作用なり。凡そ人の思想を發表する機關として個々の概念の必要なることはいふを待たざるところなれど、個々の概念のみ存してもこれらを統一判定する作用なくば、思想の完全なる結成となることなし。かく統一判定する作用を

言語にあらはしたるもの即ち用言なり。(同、一四八―九頁)

というように、「陳述」の在処は用言であるとされる。これまで引用したところからも既に明らかなように、山田文法の述体文が内容とする思想とは分析判断としてのものである。分析判断は事態を対象とし、これを実体と属性とに分析することを以て対象の在り方を把握する、という認識の構造に則るものである。述体文とは、分析判断に於ける対象的な次元の面は主格―賓格が担い、作用的な次元の面即ち「統覚作用」は述格が担うという格の關係を以て、その言語形式としたものである。このとき対象的な次元を担うものとして、

実体…主格…その表現―体言

属性…賓格…その表現―用言

と分析できる。ここで、次の二文を述体文を代表する例として対照すると以下のようになる。

花咲く。

花紅なり。

先ず明かとなることは、前者には述格それ自体を語として直接表すものがないということである。にもかかわらず、我々の日常の文意識では、主語―述語で文であるとして、前者の方を多数とし述体文の典型であると見なす。「花紅なり。」の場合には、「花」と「紅」が主格―賓格の相關で対象的なものであり、「なり」が述格で作用的なものである。ここでは、判断構造の作用的な次元は言語形式として視覚的にも対象的な次元との異なりが明白である。これに対して「花咲く。」の場合には、「花」と「咲く」で主格―賓格の相關であり、ここにそれ以外の語はない。判断の作用的な次元を言語形式として直ちに把握することは出来ない。しかしながら、右の二つは

述体の文として在ることに変わりはない。そうであるならば、「花咲く。」の文に於いて判断的作用的な次元は何処に見出すことが出来るのか。

ここで、或いは判断的作用的なものは、主格—賓格の相關として「花」と「咲く」が構文上どのように在るといふ關係性、即ち主—賓の相關そのものという關係性を以て言語形式として表されているという観点に立たない限り、構文上に要素的な言語形式を求めることになる。「花」「咲く」がこの順に並んで文として在るといふ現実に於いて、「なり」に相當するものを抽出し言語形式の整合性を見出そうとすれば、その処理として屬性表現の「咲く」に「なり」に相當するものを仮託するという在り方は一つの合理となる。ここに「統覚作用」の言語的表現として、用言に「陳述」という機能が具有されるという論理が構成されるに至るのである。

ところで日本語に於いては、体言が実体の表現を担うものであることだけで論理的矛盾を来さないように、用言が屬性の表現を担うものであることだけで論理的矛盾を来すことはない。判断的作用的な次元を構文上に抽象するに際して、用言が賓格と共に述格を重ねて担うと抽象することと、体言が主格と共に述格を重ねて担うと抽象することとの間に、「格」の關係を抽象するということでの論理的な優劣は本来生じない。仮に述格を体言が重ねて担うとしても、或いは用言がそうであるとしても、体言が表す主格も用言が表す賓格も共に対象的であり、作用的な述格とは次元の異なるものがある。体言も用言も構文關係として自己の内部に次元の異なるものを抱えることに変わりはない。作用的な述格を主格と賓格との關係性としてではなく、構文上に要素として抽出しようとするれば、第三の語の存在が要請される。ということは、述格を抽象するに際して、關係

性としてではなく要素として捉え、主格ではなく賓格に構文上の優先権を与え、これを以て全体の論理的整合性を賓格の表現である用言に託したものが「陳述」ということになるのである。ここでの立論は、主格に優先権が与えられるならば、体言に「陳述」が託されるという抽象を可能性として含むことである。また、二つの抽象の間に論理的な優劣はないということである。山田文法の「陳述」とは、現実の言語形式を以て述体の文が判断の構造に対応したものであることを説くため、用言に仮託された「なり」、即ち断言の助動詞に相當するものである(注2)。

用言は、一般的に文意識では主語—述語關係で述語となるものであり、その内実は屬性の表現としてのものである。その述語となる用言が文の内容である判断構造との連関から、「賓格」として屬性の表現を行い「述格」として統覚作用の表現を行うという二重の性質を担う、とする論理展開を調和的に導くための概念、それが「陳述」である。従って「花咲く。」に於いては、「咲く」は屬性と「陳述」との二重の表現を行うと分析することが妥当なものとなる。

しかしながら、仮に用言が「陳述」を具有するとしても、その抽象は用言が述語の機能を發揮する場合に限定されよう。用言が構文上に立つ位置のあれこれ、例えば、主述關係を転倒した姿とも言える連体關係の「咲く花」、また連体句の「花咲く小道」等に於いても、用言「咲く」には常に陳述があると了解することは困難であろう。或いは「花咲く小道」の「花咲く」では一旦文として成立したものが連体の關係へと移行したことを捉えるべきとの主張が在るかも知れない。しかしながら、この「花咲く」は「美しい小道」の「美しい」が「陳述」を表すものとなっていないことと同様の地位にある。「花咲く」は自己の内部に「陳述」がかつて存したか否か



は「小道」に対する連体修飾語としては直接問われるべき問題ではない(注3)。

山田文法が説く「陳述」とは、文が文であることに於いて存立する概念であり、用言が常に具有するものとする把握は不当な拡張である。

＊用言の本質と認むべきものは属性にあらざるして、陳述の作用を有すといふ点にありといはざるべからず。かゝる理由によりて、「あり」「なし」の如くに殆ど属性の考へられぬ用言も存するなり。これを以て考ふれば、この属性をあらはすといふことは用言の絶対条件にあらざるを知るべし。(同、一四八頁)

という用言の規定は、述体の文の述語を担うという在り方を本質として述べたものとしては有効であるが、限界を逸脱すれば直ちに矛盾を露呈するものである。

陳述は、述体文が生まれるときの、主語―述語の関係概念である。

## 五 呼格と指示

次に喚体の呼格について検討する。山田文法は、

＊呼格とは文句中にある他の語と何等形式上の関係なしに立てる語の位格にして、その対象又は対象を呼び掛け指示する形をとるによりてこの名あり。

呼格は上述の如き性質を有するものにして思想上の必要に応じ、如何なる場合と限らずあらはるゝものなり。これは思想上の関係より見ればもとより相対的のものなれども、語として表示せられたる結果即ち形の上より見れば他の語との間に形式上の拘束を起すことなくして絶対的のものといふべきなり。(同、

## 六七頁)

と説く。このように、呼格とは文に於いて絶対的なものであり、言い換えれば、自らが他に対して相関することを予定しない存在である。とするならば、体言以外の品詞も現象的には呼格と同様に「し」「静かに」「だまれ」等として単独での表現を成すかと見られるが、これらは構文上の修飾格或は述格としてのものであり、言語の表示としては相対的なものである。従って、体言だけが語の本質として呼格を担うことになる(同、六七―三三)。このことを山田は、

＊実に呼格は体言の最も根本的の運用方式にして、同時に体言の本格的の運用方式はこの呼格にあるものと考へらるゝものなるが、体言の有する多くの位格はいづれも相対的のものにして、しかもそれらの位格は他の類の観念語を用ゐてもあらはし得べき位格なれば、こゝに体言の体言たることの運用上の特徴は実にこの呼格たりうる事に存すといふべきなり。この故に、運用上よりして体言とその以外の品詞との区別を識別せむとするものはそれが呼格に立ちうるか否かを以て標準とせば直ちに知らるべきものなりとす。この故に呼格に立つを得るものは体言に限れりといふを得べく、又之を逆にして体言特有の位格は呼格一のみなりともいふことを得べきなり。(同、六七―三四頁)と主張する。

前節に見たように、述体に関する山田文法の論理展開では、統覚作用の構文形式への転写に於ける根拠として、用言に「陳述」の概念が用意されていた。しかしながら、呼格に立つ体言には、同様の論理展開を可能にするものとして、何か「X」なる概念が設定されているということはない。『日本文法学概論』の記述の中に、用言



については、語の類別（第五章、語の類別）その概説（第十章、用言概説）述格（第三十二章、述格）という何れの関連項目に於いても「陳述」が説かれているが、体言については、語の類別（第五章、語の類別）その概説（第六章、体言概説）呼格（第三十一章、呼格）の何れに於いても「X」というようなものが取り上げられ何かが言及されるということはない。山田文法が呼格について説くところは、述格を説くことと同値的な論理の展開となっていない。述体の統覚作用は述格が担う。述格は用言が陳述の機能を發揮する構文上の形式である。これが述体での論理展開であった。では、喚体の統覚作用は呼格が担うとすれば、呼格は体言が「X」なる機能を發揮する構文上の形式か。即ち、体言が呼格という構文上の格を担うということとは如何なることであるのか。

ところで、呼格に対してこのような問い掛けと批判を受けることは、山田に於いては甚だ不本意なものであるかもしれない。先にも見たように、述体文については内容である思想の統覚作用を構文上へ転写する在り様からしても判断として捉えていることが明示的である。これに対し喚体については、その内容を思想とし統覚作用を構文上へと転写しようとはしたにしても、以下に述べるような意味で判断であると明確に意識していたどうかは明かではないからである。本節の冒頭に掲げた呼格についての引用部分に続いて山田は、

\*\*\* この呼格というものの言語上に存する内面の事情を考ふるに、これ実に吾人がある思想を表示せむとする時に了解作用に訴ふるの方法によらずして端的にその思想の中核たる観念を提示するに基づくものなりとす。（同、六七二頁）

と述べている。喚体に於いて、「対象又は対者を呼び掛け指示すること、或いは「思想の中核たる観念を提示する」こと、というよう

に呼格の内容を説いてはいるのであるが、それ自体が喚体文の発言者たる主体にとつては判断そのものである、ということは見逃してゐるのではないかと思われる。右に見るように、呼格は対象を呼び掛ける形式として、体言のみが取り得る形式である、という構文上の特徴を強調する。けれども、それが如何なる判断に於けるものかという分析へとは導かれない。

文は全て何かについての判断を表すものである。何かとは端的には事態とすることが出来よう。これが我々の文に対する一般的な意識であり、判断を思想としても同じである。それは思想ないしは判断に統一という点を見るからである。統一とは、それを為す私に於いて何かがあるのと捉えられていることである。その中核は「何々デアル。」と表現される意識のありようである。統一に達していないものは、思想の断片即ち概念ではあるが、その表現を文とすることは出来ない。この意識を以て山田文法の統覚作用の説に向かうならば、これは文の内容を構成する判断の在り方を広く指すものであると理解される。そのことは第三節にも引用した、

\*\*\* 吾人がこゝにいふ統覚作用とは、意識の統覚作用を汎くさせるものなれば、説明、想像、疑問、命令、禁制、欲求、感動等一切の思想を網羅するものなり。（同、九一七〜八頁）

という文言にも明かである。しかしながら山田は、喚体の場合の統覚作用を、述体の場合のように判断とは認識してはいなかったのではないかと思われる。極論すれば、喚体では述体のような判断の構造的な姿を言語形式として見出せないことから、喚体の判断について独自の論理を抽出できず、単に感動といったものを以て統覚作用と見なしたのではないかと考えられる。もしそうでなければ、判断の構造分析と「陳述」という構文機能の抽出という述体文の研究で

の在り方に平行して、喚体でもその判断の構造を分析し、それから派生する構文機能の抽出というプロセスが予想されよう。しかしながら、喚体に於いて判断が如何なるものか、また「陳述」に相当する「X」なるものはどのようなものかといった研究は山田文法にはない。

喚体の論理を明かにするためには、内容である判断が如何なるものであり、どのような構造のものとして構文関係を把握できるか、これが課題である。ここに、山田が述べている呼格の内容を、対象的な次元と作用的な次元という判断の内部構造に於ける在り方を以て捉えるならば、

・対象的な次元…「対象又は対者」「思想の中核たる観念」

・作用的な次元…「 $\hookrightarrow$ を呼び掛け指示する」「 $\hookleftarrow$ を提示する」

となる。喚体とは体言が「呼格」として判断の二つの次元を表すとする論理展開である。しかしながら、述体での論理展開に平行的なものを喚体に於いても目指すならば、「陳述」に相当する構文機能を、例えば「指示」として抽出することが必要である。述体で、体言が「陳述」を表す構文上の地位を「述格」として、対象の「主格—賓格」とは次元を異にするとしたことに合わせるならば、体言が「指示」を表す構文上の地位を喚体の論理としては用意する必要がある。だが、これらのことは山田文法の喚体の論理に於て一切明らかにされてはいない。ということとは、ここに見られる述体と喚体との整合性の無さは、山田文法が喚体の内容を判断と捉えていないことによることは明白である。山田文法は述体の論理を追究することとは異なる観点で喚体の論理を追究したことになろう。統覚作用は、述体と喚体とでその指すところの内実が異なる水準であることを了解する必要がある。山田文法は、感動に包まれた観念の表示

として、体言が「呼格」としてあるということを結果として宣言しているに過ぎない。

前節での検討で、述体文の内容が分析判断としてのものであることに照らせば、喚体文の内容は指示判断としてのものであることは明白である。分析判断は対象である事態の把握を主体が実体と属性とに分析することを以て行う認識構造である。指示判断は主体が対象との繋がりをつけて自己の意識の場へそれを登場させる為の認識構造である。「コの何々」と表現されるように、主体が「コ」と事態を指し示すことで、それが何であるかの把握を行うことである（注4）。分析判断の作用的な次元を山田文法は「陳述」として用

言の具有する機能と抽象したのである。「陳述」の本質は対象的なものの承認の表現ということであるから、構文上は主格—賓格の関係性それ自体ということである。そのことの指標となるものが実質用言では語的形式としては顕現しないところから、その在処を用言が具有する機能とすることで整合性が図られたのである。指定の助動詞がその関係を代表して在る、という構文関係とするならば、山田文法の「述格」は「主格—賓格」という関係性を実質とするものである。分析判断を担う要素として「主格」「賓格」が構文上にその地位を有するといふのであれば、これらをその関係にある構文上の部分表現として「主語」「述語」と称することが全体に対する部分の表現として論理的と考えることができる。

述体の文は、主語と述語の相関より成る。

以上のように述体の「陳述」を把握するならば、喚体の指示判断の作用的次元を表す「指示」は機能として体言が具有するという合理を求める必要はないことになろう。「陳述」とは、述体の文の内容である分析判断の作用的次元、山田の統覚作用を構文上に転写す

る概念ではあるが、我々が文に於ける在り方として把握するものは、主語と述語の相関そのことである。ここに、同様の論理展開を喚体の文にも求めるならば、それは次のようなものであらう。

「指示」とは、喚体の文の内容の指示判断の作用的次元を構文上に転写するための概念である。喚体の構文上は主体に於て「コ」の關係で取り上げられた体言がそれを担っているのである。その關係そのものは、構文上他の語との間に拘束關係を起こさない、独立的である、絶対的である、という非相関的規定によるものである。そのことからすれば、喚体の文は体言の構文上での単独性による、即ちこれを「独立語」と称することで内包する論理の表明とすることができよう。

喚体の文は独立語より成る。

先に、述体の指標は指定の助動詞をその代表として見たことに照らせば、喚体の指標は、山田が間投助詞「よ」について

\*\*「よ」　こは確然と指定する意の助詞なり。(山田一九〇八、六

八四頁)

とするとともに従いこれを代表とすることが良いかと考える。それは、喚体の下位分類を山田に従い「感動喚体」「希望喚体」とするとき、希望を意味する終助詞「が」を以て、「希望喚体」を喚体の「種」の一つと捉えることへと連なることができるとの予想からである。また、凡そ述体と喚体とが同じく判断の表現として文としてあるとは言え、分析判断と指示判断とはその領域を異にする。判断の指標にそれが反映するとの予想を持っている。

## 六 おわりに

本稿は、述体の述格と喚体の呼格に焦点を当てることにより、文に於ける内容の構造と文の形式との關係を検討しようとしたものである。それは、喚体の統覚作用を「指示」として把握しようとする筆者の喚体分析(石神一九九七a、一九九八)を、山田文法の述体と喚体の研究を対照することで文の原理的研究として深化させようとの意図である。喚体構造の具体的分析、及び述体と喚体との文としての連関の追究が今後の課題である。

## 〈注〉

- 1 山田文法は、文の素たるものを「句」と称し、「句」が運用されたものとして「文」と称するべきとの考えをとる(山田一九三六、九〇四頁、一〇五二頁)。しかしながら、これは複文を構成するに際して、要素となる単文が文としての内容を有しながら語的存在へと転換する、という在り方をとることの論理を明示できないところから、単文に対し文末満の「句」という概念を導入し、論理的整合性を図ろうとしたものと思われる。従って山田文法の「句」は通常の文としての扱いをすればよい。これに就いては「文研究の論理」(石神一九九七c)の中で論じた。
- 2 山田文法の「陳述」は、

\*\*統覚作用の寓せられてある語即ち用言たるものにして従来の説明の如くはたらき詞又は「はたらき」をあらはす語といふ如き意にはあらず。この用言には統覚作用と共に属性觀念もあらはすことあれど、属性觀念の存することはいはゞ用言としては偶然的現象

にして用言の必然性としてこれが存在を認むべきにあらず。何となれば既にいひたる如く属性観念は副詞としても体言としてもあらはされ得るものなればなり。こゝに於いて用言の用言たるべき特徴は統覚の作用即ち語をかへていはゞ、陳述の力の寓せられてある点にあり。この陳述の力の寓せられてありや否やの点が、かの体言と用言との区別すべき主眼点なりとす。(山田一九三六、九五頁)

という文言に明らかなように、語の原理的区分を導く機能である。しかしながら、その一方で、「陳述」の内実である判断の作用的なものは主格と賓格という対象的なものの相関そのものという関係性であることを、

\*\*述格の表す陳述とは……思想上、主位観念と賓位観念との対比といふことの存立といふことを先在の条件として、その二者の間の関係が異か同かのいづれにあるかを明かにする為の精神的作用の言語的発表なり。(同、六七九頁)

と説く。これは山田の「陳述」論が単なる機能論ではなく、内容である分析判断を言語上に格として転写しようとした構造の論であることを示唆するものである。これについては、時枝文法の「陳述」を含めて、本稿に先行する「文研究の論理」(石神一九九七c)で論じた。

3 山田文法の「陳述」が矛盾をはらむものであることは、例えば「花の咲く樹」「人の住まぬ家」について、

\*\*主格と述格とよりなるといはるゝと同時に、相合して「樹」「家の限定語たる位置に立てり。この故にこの場合の「花の咲く」「人の住まぬ」は厳密にいはゞ陳述をなすものにあらずして「花」といふ主格と「咲く」といふ賓位観念との結合せられてあるものを体言の限定語としてあらはせるに止まりて、未だ十分に陳述をなせりといふを得ず。(山田一九三六、六九一頁)

という記述の中にも読み取れる。今日この問題の解決方向を示す原型のものは、渡辺文法が構文論として明かにした「陳述」内部の機能分

析という方法である(渡辺一九七一)。そこでは、文となる以前の内容の統一に関する「統叙の機能」と、それ以外の文であることを決定する「陳述の機能」とが分離して論じられる。「花咲く小道」の用言「咲く」の「陳述」の不十分状態は、構文機能の精密化により説明可能とし、理論展開が行われる研究である(同、第二節 統叙の機能、殊に八四頁以下)。

しかしながら、「陳述」に対してこういった方向での検討は、構文機能としての精密化ということでは同意できるものの、山田文法が「陳述」の基盤とした判断構造との連関ということが見失われるのではないかという懸念が生じる。内容の統一と文であることを決定する判断とが別の次元で行われるとすることで、連体句に於ける「陳述」の矛盾は或いは解消されたかに見なされる。だが、内容の統一に対してその根拠となるものを提示することがなければ、これは単に結果を以て用言に機能を付与することによる議論ということにもなるのである、山田文法の構造の論が捉えた成果の水準を辿ることが出来ないものとなるのではないか。

用言連体形に露呈する、文となる以前の内容の統一とその展開という問題とは、一旦文として成立したものの性質の移行ということではないかと考えられる。この種の問題の追究は単なる機能論では問題の本質を見失うことになりはしないかという疑いを抱く。広く用言の連体形の問題は、連体構造一般の問題であると共に、文に於ける判断の「実質化」ということに関わる問題であると考ええる。この種の問題を解くための重要な視点である「実質化」(松下一九二四、三七四頁以下)の論理は松下大三郎が説くものである。また、同一の論理を時枝誠記は「詞辞の転換」(時枝一九四一、二八七頁以下)「格の転換」(同、三九五頁以下)として説く。この論理は、山田の矛盾を超え日本語の文法研究に新たな展開をもたらす可能性を持つと考ええる。筆者も「実質化」に関連して認識と構文及び連体構造を検討したことがある(石神一九九三、石神一九九五a)。

4 ここに「指示」を「コ」とすることは、主体から対象へのベクトルとする相対的な距離換算（「こ」を近接、「あ」を遠接）とすることではない。これら相対的な関係を超えた原型としての関係設定を意味する（石神一九九八）。

# 〈参考文献〉

- 石神照雄（一九九三）『推量の認識と構文』『国語学』一七四集  
 同（一九九四）『一語文の原理と文の類型』『国語論究』第四集、明治書院  
 同（一九九五a）『連体の構造（五）―形式化と準体―』『信州大学教養部紀要』二九号  
 同（一九九五b）『一語文と喚体』『国語学研究』三四号  
 同（一九九七a）『感動喚体の構造』『信州大学人文科学論集』三十一号  
 同（一九九七b）『文研究に於ける喚体への視点』『方言・ことばの新研究』明治書院  
 同（一九九七c）『文研究の論理』『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房  
 同（一九九八）『呼格と指示―感想喚体の構造補遺―』『信州大学人文科学論集』三二号  
 川端善明（一九六三）『喚体と述体―係助詞と助動詞とその層―』『女子大文学』一五号  
 北原保雄（一九八一）『日本語の文法』（日本語の世界6）中央公論社  
 時枝誠記（一九四一）『国語学原論』岩波書店  
 松下大三郎（一九二四）『標準日本文法』紀元社  
 森重 敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房  
 山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』宝文館

同（一九三六）『日本文法学概論』宝文館  
 同（一九五〇）『日本文法学要論』角川書店  
 渡辺 実（一九七一）『国語構文論』塙書房